

第一章 「解脱」の経済的意味

伊東利勝

はじめに

「解脱」というのは個人にかかわる問題のようですが、実はこれには社会経済的な意味があつて、輪廻の苦しみからの解放という考え方は、むしろ平等で格差のない社会の実現をめざすためのものではないか。個人が心の平安を求め、釈尊が説いた実践、とりわけ物欲の克服に向けての努力は、心に平安をもたらすだけでなく、世のため人のためになり、平穏な社会の実現に向けて、その構造を作りかえていくような働きをする。ひたすら自分のために、自分が心の平安を得るためにして起こした行動が、その意図とは無関係に、自動的に他人のためになつてゐる、逆に人のためと思つて為したことは、あんがいそうなつていない。ここで考えてみたいのは、このような上座仏教の仕組みについて、です。

釈尊の考えをさぐるということになれば、それは經典の分析によつて為される必要がありますが、ここでは「ビルマ人仏教徒」の現実に基づいて考えていきます。私は歴史学を専攻しており、具体的な事例になりますと、東南アジア、特に現在ミャンマーと呼ばれている地域の出來事を扱います。歴史学も大学で勉強したのではなく、史学科に属する現在でも見様見真似で

やっているにすぎません。仏教学についてはそれこそ日常的にも向き合うことのない、いわば全くの素人です。お話の中では成り行き上、仏教の教義についても若干ふれなければならぬようになりますが、間違ったことをいうかもしれません。

ミャンマーではご承知のように、かなりの部分で上座仏教が信仰されおり、この地に住む私の知り合いは、ほとんどがこれに深くかかわっている人たちです。歴史の現場を訪ねたり、史料の調査をしたりしておりますと、出家や在家の行動が目に入ります。また、この人たちとの何気ない会話の中に仏教の話が出てきたりします。もちろん歴史的事件も仏教に関係するものが少なくありません。

こうしたことを通して、つまり宗教に関する正面からの調査や経典研究ではなく、かれらの現実をとおして、上座仏教というものにくぐりふれることができるようになりました。今日のお話は、こうして得た知識がもとになっております。本日お集りの中には仏教学の専門家がいらっしやるかもしれません。そうした方々は、たぶん違和感を覚えられることも多々あると思います。あくまでも私が知りえた事柄にもとづき、考えたことをお話しさせていただきます。

一 仏教実践——エーヤーワディー川流域地方の例

江戸の昔から、ミャンマー（緬甸、毘牛、亜花など）は「仏教国」として知られていました。その情報源が、そうしたことを強調していたからでしょう。またその結果ということもあるでしょうが、現在ここに住んでいて、自分は仏教徒と称する人たちは、釈尊の教えを強く意識した生活を送っております。そこで、こうした仏教実践が、社会や景観にどのような彩を与えてきたかを、まず見てみたいと思います。

「乾燥地帯」の王国

そのミャンマー連邦共和国ですが、東南アジアの西端にあつて、西はバングラデシュやインドです。東はタイやラオス、その北は中国、南はマレーシアそしてアンダマン海です。本土の中央部を北から南にエーヤーワディー川が流れており、その流域にこれまでいろいろな政体が生まりました。一〇世紀以前はピューと呼ばれる都市国家群が存在したようですが、一一世紀になつて中央部の平原一帯にバガン王国が勃興し、現在ではあまりそうしたい方はしませんが、ひところは「建



図1 バガンの仏塔群

寺王朝」と称されたごとく、壮大な仏教遺跡を残しました(図1)。

その後いくつかの王国が興亡しますが、その中心は、ほんの一時期をのぞいて、中央平原地域を離れることはありませんでした。一九世紀になりイギリスの植民地となつてからは、エーヤーワディー川のデルタ地帯に位置し、海洋に接するヤンゴンが首都となりますが、近年また中央部に位置するネーピドーというところに中心部を戻してしまいました。

エーヤーワディー川流域の中央部は、雨が非常に少なく、そのままでは水稲などの耕作に適しておりません。どちらかといえば畑作中心の農業が展開されてきました。ただ雨季と乾季がはっきり分かれ、年間八百ミリ程度の降雨であっても、それが雨季に集中しますので、この時期は、いわゆる「乾燥地帯」であつても緑なす平原となります。しかし乾季はエーヤーワディー川の氾濫原や溜池の中で、農業が営まれていたにすぎません。

ただ氾濫原や溜池は、我われの想像をはるかに超え、広大な農地を提供してくれます。降水量が少なく、雨季であつても農業が安定的におこなえず、生産力の相対的に低い中央部に、海岸部や周辺の山地をも支配下に置く王国が成立したのは、ひとえにこの広大な氾濫原のおかげではなかつたかと考えております。

バガンの仏塔群

バガンは東南アジアの三大仏教遺跡の一つに数えられます。アンコールやボロブドゥール

が少数の巨大な建造物で成り立っているのとは異なり、一一世紀から一三世紀にかけて、「無数」の仏塔や窟院や寺院が見渡す限りの原野には建設されました。仏塔はいわゆるバゴダですが、塔の形をして、基壇部分のお堂中央に釈尊の像が安置されているのが窟院です。仏塔や窟院や寺院は煉瓦を積み重ねて作られていますが、そうした宗教施設が現在でも三千基近く残っております。大きいものになると、いま現在この大学の近くに立つマンシオン程度のものがあり、これらが一望に見渡せる様は壮観です。かつて在ヤンゴン日本大使館の外交官で、マンマー政府のお役所仕事に業を煮やしていた人が、この光景を見たら全てを許す気になるとおっしゃっていたのを思い出します。

なかでも有名なのが、王国の創始者であるアノータター王（在位一〇四四〜一〇七七年）によって創建されたといわれている、黄金に輝くシユエジーゴウン仏塔です（図2）。ミャンマー国内はもちろん海外からも参詣者や観光客が押し寄せてきます。高さ四〇メートルの堂々たる仏塔で、ヤンゴンにある天下随一のシユエダゴン仏塔もそうですが、全体は金箔で覆われています。全ての仏塔がこのように黄金で輝いているわけではありませんが、維持管理がなされているものは、強烈な太陽のもと漆喰の白さはまばゆい限りです。また窟院の中には、極彩色の壁画が描かれているものもあります。釈尊が悟りをひらくまでの物語や、釈尊の前に成道した仏様の姿などを題材にしたものです。

観光旅行でバガンに行くと、その規模と量に圧倒されて、初日は「すごい、すごい」と思う



図2 シュエジーゴウン仏塔

のですが、二日目あたりから同じものばかりで、少々あきてきます。三日目には、「もっと見たい」という気はおこりません。同じようなものが次から次へと現れるわけですから、様式の違い等に関心が向かないかぎり、よくもまあ飽きずに、とつい思ってしまうます。バガン時代はもつと存在したのか、また現在の遺構がそのままいちどきに存在していたかは定かではありませんが、この景観は一二世紀中ごろにはできあがっていたとみて差し支えないでしょう。

仏塔の建設活動は、今も停止していません。もちろん既存のものでも修復され、宗教施設として機能しているものもあります。死んでしまつて文化財になつたのではなく、生きのびて人びとのより所と

なっているのです。そのため世界遺産になりにくいという恨みはありますが。文化財となるためには、有名な『想像の共同体』を書いたアンダーソンがいつているように、建物が空虚な抜け殻で、過去の栄光を偲ばせるだけのものになっていなければなりません。バガンは違います。全部ではありませんが、現在でも信仰の対象として、その荘厳さを示すため、装飾が最新の技術でバージョンアップされ続けているのです。

こうした仏塔の建設はもちろんのこと、維持管理修復にも相当な富が投入されなければなりません。さきほどのシユエジーゴウン仏塔ですが、表面を覆う金箔は、風雨や灼熱にさらされるので、何年かごとに張り直さなければなりません。その量たるや、計算したことはありませんが、まさに莫大です。

仏塔を建てる

仏塔や窟院は、バガンにだけ建てられたわけではありません。チャウセーやサリンなど当時の灌漑稲作地帯をはじめ、仏教徒が住んでいたところはどこにでも、それこそ全国津々浦々に存在していたと考えられます。バガン時代以前に繁栄したピユーの城郭都市や、とくにバガン王国滅亡後、ほんの一時期ですが王都のあったザガインには、これまた集中的に建てられました。ザガインは、エーヤーワデー川右岸の丘陵地にあつて、今でもたくさん仏塔や窟院が残されており、いわゆる聖地の一つとなっております。多くは打ち捨てられた格好になっていま

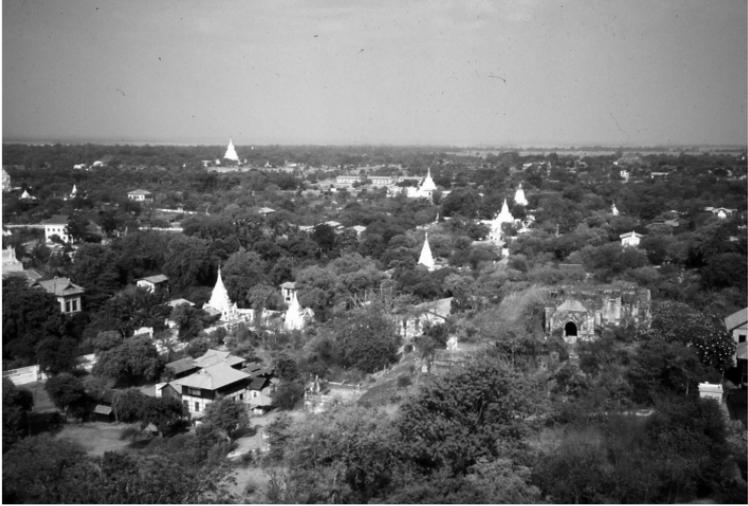


図3 ザガインの仏塔群（1）



図4 ザガインの仏塔群（2）

すが、一部は修復され、また新たなものも作られております（図3）（図4）。

加えて今でもミャンマーの主要な町には、必ずといってよいほど大きな仏塔がいくつか存在し、金箔が張られて、傘蓋部分には、宝石などが散りばめられたりしています（図5）。もちろん町だけではありません。地方のどんな村にでも必ず何基かは存在します。村の外れとか、僧院の敷地内とか、とにかくミャンマーの平野部は、どこに行っても仏塔を見ないところはありません（図6）（図7）。同じ上座仏教が信仰されているタイやスリランカとは異なるところです。このような国にももちろん仏塔は存在しますが、ミャンマーは桁外れです。表現はよくありませんが「腐るほどある」というぐらいで、実際に、全国にある仏塔の半数ほどは朽ち果てているといつてよいかもしれません。それでもなおかつ、新しいものを作るのです。

この仏塔には、釈尊の聖なる遺物が収蔵されていると考えられています。仏舎利や遺髪です。しかし仏教徒にしても、それが本当に保存されているかどうかということは、あれだけ数ですから、それはないと思っているに違いありません。ただ由緒ある大仏塔は別ですが。そ



図5 マンダレーのエインドーヤ仏塔



図6 村の仏塔（1）



図7 村の仏塔（2）

ないとわかっていても、仏様の遺物が納められていると観念することによって、ここに来れば釈尊に対峙しているというか、その存在をより身近に感じることができ、そういう施設である訳です。従ってその敷地は、聖なる空間にほかなりません。どんなに朽ちて崩れかけていようと、その境内に入るときは、履物を脱ぎます。裸足にならなければなりません。それだけ敬意が払われているのです。

それからさきほどバガンにある窟院の一部には壁画が描かれているものがあると申しましたが、これもバガンに限ったことではありません。エーヤーワディー川に沿った、かつて豊かであったであろう町や村には、窟院の規模はそれほどでもありませんが、内部の壁面が極彩色の絵で埋められているものが残っています(図8)。これらはたぶん一八世紀から一九世紀はじめに

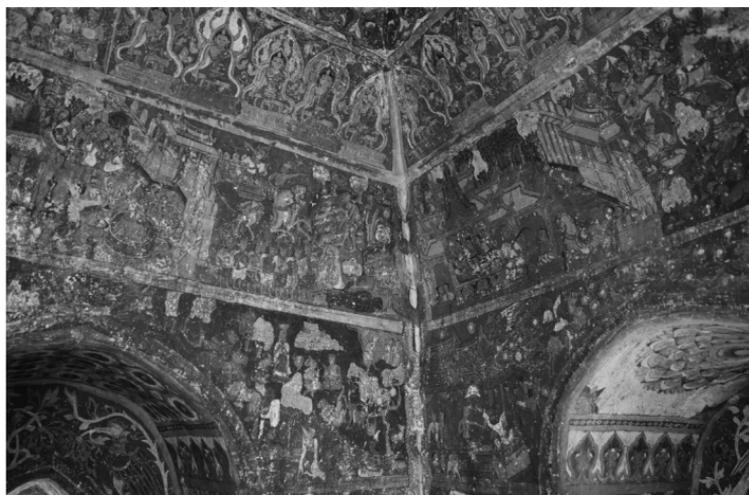


図8 アミン町にある窟院の壁画 (18世紀)

制作されたもので、題材のほとんどが「仏伝」や「ジャータ」ですが、釈尊に対して敬意を表すために、「全世界」からやってきた人たち（「一〇一の人種」¹）なども描かれています。

それこそ入り口の壁面から内陣にかけてびっしりと、鮮やかな色使いが印象的です。エーヤーワディー川流域地方の「ジャータカ」は、バガン王国時代後半から五四七話で構成されておりますが、窟院の壁画には最後の一〇話がよくとりあげられます。釈尊がその前世において、宰相であったり王子であったりしたとき、如何に機知に富み、清浄でかつ施しをよくし功徳を為していたのかということがモチーフになっております。絵の下の方には場面ごとに詞書（キャプション）があり、誰でもその話を思い出すことができるようになっております。これを見た人は、大先達である釈尊が成道するまでの善行を知り、わが身を正しこれにあやかりたいと思うわけです。

これもまた絵師に支払われる費用は、施主が工面するのです。商売がうまくいった、土地を集積した結果、毎年莫大な地代が入ってくるといった人が、財産をはたいて、職人に描かせました。余談になりますが、中世のキリスト教世界でもそうですが、宗教画に描かれる王族、役人、女官、農夫、職人などは、その時、その地方での姿をしております（図9）。時代考証などをおこなうようになったのは近代歴史学ができる一九世紀以後のことですから、当然この壁画から私たちは、一八世紀におけるエーヤーワディー川流域の風俗を知ることができるのです。つまり貴重な史料というわけです。



図9 アーナンダオウ窟院（バガン）の壁画（18世紀）

仏塔や窟院だけではありません。僧院もまた、りっぱで堂々としております。都市部に限らず、村の中にも一つか二つ、かならず存在します。しかも庶民の家は高床式の茅葺屋根であつたりするのですが、僧院は違います。もちろん村の経済力によりますが、煉瓦の土台や太い柱で支えられ、その造りは際立っております（図10）。自分たちは粗末な家に住んでも、お坊さんには立派な館に住んでもらおうという訳でしょう。とくに都市部のものは、総煉瓦造りといものが少なくありません。なかでも植民地時代に建てられたものはそうです（図11）。僧院もまた在家の寄進によるものです。お坊さんが、かき集めた資金で建てたものではありません。もちろん高名な僧侶は、たくさんのお坊さんが集まるとは思いますが。古都マンダレーにある大きな僧院には、王国時代に王族や大臣、長者が建てたものを、在家が維持して現在にいたっているものが少なくありません。



図10 煉瓦土台の木造寺院（サリン）



図11 ミンウン寺閣のシュエ寺院（マンダレー）

これら宗教施設の建設費用、ここに投入されている財は生半可な量ではありません。日々営みの中で蓄積された個人の資産が使われているのです。しかし、これは決して新たな富を生み出しません。経済的にみれば、いわば消費された富の最終形態。我われの感覚からすれば、金箔で輝く仏塔を見ると「何と無駄なことを……」と。私などは、こんなお金があれば工場の建設やインフラの整備など、生産的なものに投資すれば、経済はもつと発展し、生活は豊かになるのと思ってしまう。ところがこうした考えが、自らを苦しめる原因になっていることが、彼らとの付き合いの中で思い知らされるのです。

碑文に残す

仏塔が個人によって建てられる場合は、その縁起を記録に残すこともおこなわれていました。どこの誰が何月何日に、何のためにこのような仏塔や窟院を建てたのかということが記されています。だいたいは国王や王族、高官、長者などが、自らとともに、生きとし生けるもの成道のために、あるいは来世で弥勒仏に相まみえることができるように、ということ。大きな功德を為して、できれば涅槃に至りたい、弥勒仏の知遇を得、「はじめよき、なかばよき、おわりよき」説法を聞いて悟りをひらき、輪廻の苦しみから解放されたい、というのがあります。廻向も自分が為した功德の一部がそちらに回るというのではなく、そうした思いで寄進をすれば、相手はおろか自分の徳も増えると理解されているのです。

従って功德はこっそりとするのではなく、堂々と他人に知らしめる必要があります。こうした意図がよくわかる例が、第三代チャンシッター王（在位一〇八四〜一一一三年）の息子ヤールザクマールが一一二二年に残した、非常に有名なミヤゼディー碑文です。父親のためにグーピャウチー窟院を建立して、そこに黄金の仏像を納めたことが、四角柱それぞれの面に古いビルマ語、パリー語、古いモン語そしてピュー語で書かれています。文字はピュー以外は古いモン文字ですが、当時バガンに住んでいた人たちがよくわかるようにと、代表的な四言語で寄進の内容を記したのでしょう。「ビルマ（ミャンマー）のロゼッタ・ストーン」といわれているもので、言語学の史料としても注目をあびました（図12）。

石碑を立てることはまた、別の意味もありました。先ほど施主の名前や年月日、寄進の目的が書かれていると申しましたが、その他自分が建てた宗教施設の維持管理のため、土地や村、その耕作者や住民の名前も記されたものもあります。そうした場所から納入されていた地代や租税が、今後当該の宗教施設に納められるということになります。いわば国家からすれば免税地になるわけで、これを未来永劫にわ



図12 ミヤゼディー碑文

たつて保証する証文の役割を果たす訳です。このようなものがないと、いつ何時、寄進された寺領地が、国家や領主に横取りされるかもしれません。碑文の最後には、寄進を邪魔する者に対する呪詛も記されており、寄進を妨害したり、破壊したりしたものは、永遠に輪廻の苦しみを受けよとか、焦熱や黒繩地獄に落ちよとか。

ちなみにバガン時代の碑文は六百枚程度残っており、これが歴史研究にとつて第一級の史料となつています。紙やヤシの葉ですと、あのような気候のところですから長くて三百年ぐらいしか持ちません。しかし石に刻んでありますので、素材の耐用年数は半永久的ともいえます。寄進者の官職名や職業、建設に要した資材やその費用、村からあがる税金の種類や額、それをはかる単位、その徴収方法（行政制度）、農地の種類、作物、住民の職業など、当時の社会を構想する手掛かりが記されています。寄進した人は、こんなことに利用されるとは考えもしなかつただろうと思いますし、本来の目的からすれば邪道ということになるのでしょうか、今では社会経済史や言語学の史料として利用されています。文字の形や語法は現代ビルマ語と同じではありませんので、読むのは大変ですが（図13）。



図13 碑文の拓本



図14 道で出会った僧侶に敬意を表す

先達に敬意をはらう

宗教施設に富が投入されるのは、人々が仏教の考え方を教え込まれたからに他なりません。そして釈尊の教えを信頼し、これを日々実践することを生きがいにしたからでしょう。その意味で、僧侶には特別の敬意が払われます。何せ釈尊が規定した二二七の戒律をよりどころとし、人間的な生活を捨て、日々これを実践することなど、生半可な気持ちではできません。誰でも知っているからです。我欲との闘いを、口先でなく自らの行動で私たちに示してくれているのですから、その言葉には真理がやどり、尊敬の対象にならない訳がありません。

私には、エーヤーワデー川流域史の研究をするうえで、大変お世話になっているお坊さんがいらっしやいます。マンダレーの由緒ある寺閣に住んでおられますが、何と歴史にも大変興味のある方で、私が地方へ調査に出かけるときは、たいてい付いてきて下さいま



図15 水を汲みにきたら

す。もう三〇年も前になりますか、植民地時代、とある片田舎で起こった農民反乱の調査に行ったときのことで。私の前をそのお坊さんが歩いていたので、何と出会った村人はただちに脇に下がって、土下座するのではありませんか(図14)。大名行列よろしく、お坊さんに対して、地に額をつけて、礼拝するのです。マンダレーからきた高僧といっても、外見ではそれとわかりません。つまりお坊さんにはこうした接し方をするものだ、ということを目の当りにした次第です。

またおなじ旅行中のことですが、夕方ある村に着いたところ、若い女の子が家事に必要な水を汲みに、村の共同井戸のところにやってきているのに出くわしました。するとその女の子たちも、このお坊さんを見かけるや、一斉に額ずいて、礼拝したのです。図15は、やらせでも何でもありません。こうしたことは、私にとっては非常な驚きで、ここまでやるのかという光景に接した次第です。もちろんヤンゴンやマンダレーな

どの都会では、たくさんのお坊さんに出合いますので、いちいちやっぺいられないとうこともあるでしょうが、それでも、お坊さんに対する敬意の払い方は、半端ではありません。

ビルマ語には、お坊さんに対する言葉には、普通の会話では使わない特別な単語が用意されており、また、お坊さんに捧げものをするときには二メートルぐらい前から、靴やスリッパなどの履物を脱いで、裸足になります。これは先述の仏塔のみならず、僧院の敷地にはいるときでもそうです。お坊さんの周りは聖なる空間という認識があるからに他なりません。

最後にもう一つ。マンダレーのこのお坊さんの僧院(図11)に泊まっていたときのことです。夕刻でしたか、お寺にやってきて、しきりにこのお坊さんを問い詰めている人がいました。聞くともなしに聞いていると、「今日、なぜきてくれなかったか」といつているのです。この人は茶店の主人で、毎日このお坊さんは散歩の途中に、その店に立ち寄っていたようです。ところが今日はこなかった。それは何故かと訊いているのです。お坊さんは、「いや、今日、ちょっと別のところに用事があった」と釈明していました。

なぜこうしたことで、わざわざ出かけてきて、詰問のようなことまでするのか。それはこの店主にとって、功德をする機会が奪われたことを意味するからです。紅茶を飲んでもらうことにより、功德を為すことができる。毎日、きてもらってお茶してもらうことが、その人の心に平安をもたらす訳です。今日、お迎えてできなかったということは、何か自分が悪いことをして嫌われたのかという不安もさることながら、お坊さんに施しをして功德をする機会(図16)を



図16 托鉢の途中でお茶の施与

逸してしまったことに對して、ものすごく残念な気持ちになったからでしょう。「今日はこなかった。紅茶をただ飲みきれずに済んだわ」などとは思わないわけです。

何しろ仏教徒の生活は、僧侶や僧院、仏塔など、功徳をする手段となるものをめぐって展開しているといってもよいでしょう。年中行事にしても、仏教に關係する祭りで彩られています。ビルマ曆（小曆）で新年の始まりを告げる四月の水祭りには、祭日を利用して一時出家する仏教徒男性が少なくありません。水祭りそのものは仏教とは無關係のようですが、この機会に頭を丸めて、数日間僧院に入り、修行するのです。また仏像を清めたり、僧侶や周りの人におふるまいをしたりします。そしてつぎの月の満月には、釈尊の成道にちなみ、インド菩提樹の根元に水をかける祭りがあります。

雨季にはいりますと、安居といって僧侶は寺に籠って修行に励むわけですが、一般の人のなかにもこの期間、一時的に出家する人もいます。町で、頭を丸めた公務員や会社員がやたらと目につくのは、この頃です。安居があける一〇月になって乾季が始まると、結婚式や演劇がおこなわれるようになり、仏塔や家々が電球や灯明で飾られる灯明祭が待ち受けています。またカティン（カティナ）祭といって、僧侶に袈裟や托鉢セットその他日用品を寄進する催しがおこなわれます。となり近所や村の人たちが連れだって僧院に赴き、こうした供物を受け取ってもらい、そのあと斎飯のお相伴にあずかり、一日たのしくお寺で過ごすのです⁽³⁾（図17）。

ミャンマーには僧院数が二〇〇九年段階で六万近くあるとされております。尼僧院も三千近く存在します。現在、上座部の世界では、公



図17 カティン衣奉献のためお寺に向かう

式的に尼僧は存在しないことになっているのですが、ちゃんと戒を守って修行をしている女性
がおり、ビルマ語でテラシンと呼ばれています。僧侶および見習僧は五十四万人。ミャンマーの
総人口が約五千万人ですから、一割ぐらいいは僧侶および見習僧ということになります。そして
見習僧、つまり沙弥が比丘（僧侶）よりやや多い。比丘には、満二〇歳にならないと入れません。
厳密にはお母さんのおなかに宿って二〇年ですから、一九歳と二か月でなれますが。それまで
は、僧院でいくら修行していても沙弥というわけです。それから仏塔ですが、統計によれば今
でも年間で、千四百基程度は建てられているということ¹⁾です。

二 上座仏教の世界観

ではこのような現象は、如何なる考え方によって生み出されるのでしょうか。これからお話
しするのは、現在ミャンマーといわれる土地で、ビルマ人仏教徒を自認する人たちの宗教実践
や徳目とされているものを素材にしたお話になりますが、基本的に上座仏教といわれるものの
世界観に根差すものに他なりません。

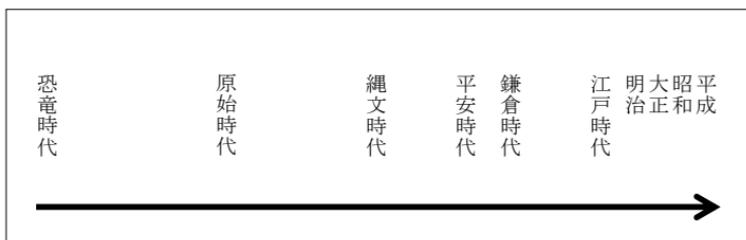


図18 近代歴史学による時間の観念

空間と時間の接点

まずは根本的なところから。私たちは自分の存在をどのような座標軸で考えているのでしょうか。少々おおざっぱないい方になりますが、自分が空間と時間の接点に存在しているということについては、誰しも異論はないでしょう。空間については、現在、私たちは宇宙の中に存在する地球という星の表面にある日本という国の真ん中あたり、愛知県豊橋市町畑町にある愛知大学という敷地のやや南東よりに立つ研究館一階の会議室という所に居ます。しかし、あと二時間もすれば、それぞればらばらに、違った空間に存在することになります。

ただこれは、近代になってからの、いわゆる科学的知識に基づくもので、それまでは宗教によって多少の違いはありますが、仏教でいえば、この地上（閻浮提）に人界、畜生界、餓鬼界が存在し、天には天上界がある。天上界は一番上から無色界天、色界天、三三天などがあり、その下に我われに馴染み深い兜率天とか忉利天が含まれる欲天があります。また地下には地獄界、すなわち等活、黒繩、叫喚、大焦熱、などと下っていく、最も深いところに無間地獄が存

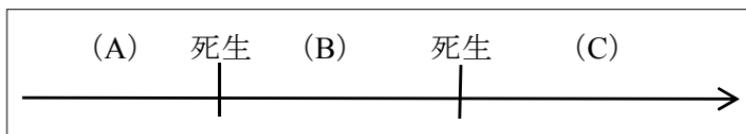


図19 生と死による時間の流れ

在します。生きとし生けるものは、一つの生を終えることに、この中を上がりたり下がったりしていると考えられています。ただ、地獄に落ちたら、もう這い上がれないようですが。

そして時間ですが、これは二つの流れの中に自分を位置付けていると思います。現在は二つですが、前近代は一つであったに違いありません。二つの流れの一つは、例えば「現代に暮らす私たち」というように、原始時代、石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代、平安時代、鎌倉時代などという流れの中で、明治時代になって国民国家ができ、大戦を経て、現在の社会ができあがり、その中で生きていると考えます。図18のように、左から右に一直線に時間は流れ、その右端に、我われは存在している訳です。縄文時代や江戸時代にはエアコンや車などはなかったが、今はこのようなものが作られるようになり快適で便利な世の中になった。しかし環境に負荷がかかりすぎ、これからどうなるだろうかという、思考をめぐらします。「子孫にきれいな地球を残そう」という思いは、この線をもっと右側に進めるものではありませんが、その時、私たちはいません。一九世紀にできあがった近代歴史学に基づく進歩史観のなかで自分の存在を考えるとこうなります。

ところがもう一つ、こちらは人類の出現とともに、具体的には「死」の観

念ができあがるとともに、形成された時間軸があります。つまり自分は誕生して何年たっているか、経験的にみてあとどれくらい生きるか、もうあと何回ぐらい冬をすごし、春を迎えることになるのか、ひよっとしたら明日かもしれないとか、そういう流れの中に今の自分を位置付け、また他人をみる。これには確実に二つの区切りがある。生と死です。人それぞれですが、生から一八年しかたっていないので、次の区切りまで、平均的にみてあと七〇年ぐらいはあるとか、今は生から七〇年たっているので、あと一〇年程度で、この人生は終わりを迎えるとか、判断します。もちろん、そう思っているでも明日、終わりがくるかもしれません。

どの位置に居るかは人によって違いますが、二つの区切りのなかで現在の自分を考えることは皆同じです。お母さんの胎内に宿り、生を受け、そして死んでいきます。このことから逃られる人はいません。そうすると誰しも、その前、図19で示せば(B)を現世としますと(A)、そして(C)はどうなっているだろうかと考えてしまいます。(A)についてはどうであったかはあまり考えないようにしても、死んではどうなるか、つまり(C)について、気にならない人はいいでしょう。まだ若くて、自分自身はまだ先のことだと思っても、身近な人、かけがえのない人が死ぬと、どうしても考えざるをえない。親や兄弟や、連れ合い、おじいさん、おばあさんが亡くなると、その人たちはいったいどこに行くのだろうか。(C)のところが説明できないと、愛する者との別れ、そしていつかは訪れる自分の死になかなか向き合えません。

新手の妖怪・幽霊

以前といっても前近代ですが、みんな死んだら星になって、われわれをずっと見守ってくれているとか、月に行つて、そこで今よりも安楽な暮らしをしているとか、考えていました。今、ここで生きながらえて、癌に苦しむよりも、そういう世界に行つたほうがその人にとっては幸せである。この地上にいるより、安楽な状態になれる、というような説明を信じていることができれば、人の死を受け入れることも、別れの悲しみに折り合いをつけることもできた訳です。そして自分も、そういうところに行けると確信できれば、心が少しは楽になります。つまり、死んでから先のところ（C）が説明できていると、別離の悲しみや死の不安は軽減されるのではないのでしょうか。

ところが、「科学」というものが発達してくると、月や星の実態が明らかになる。魂は月に行つていたと思つていたけれども、天体望遠鏡で見たりロケットが飛んで行つて調べてみたりしたら岩石ばかりであった。探査衛星によつて、金星や土星の姿がはっきりと明らかになる。こうして死後の世界、つまりあの世についての豊かなイメージが次々と消されていく。消すのはいいのですが、「科学」は、消したあとに何も描かない。（C）のところを空白にし、経験的に証明できない部分を説明することは「非科学的」として、これを放棄してしまふ。

しかし人間は、だれでも（C）に行かなければなりません。行かなくて済む人は、ひとりもいないのです。なのに、そこがどんな所であるかわからない。これまででは、西方浄土だとか、

補陀落山だとか、神々の住む世界だとか、いろいろと視覚化し実体化されていたものが、「科学」の力によって、しらじらしいものとなっていく。そうすると、私たちはいったいどこに行くのかと、極めて不安になり、それまで以上に死が、恐れや忌避の対象になる。しかもそこがわからないとなると、ここにいろいろなものが住み着くようになります。餓鬼とはまた違った、妖怪とか幽霊とかがはびこってくる訳です。

ですから、「科学」が発達しているのに、幽霊や妖怪がまだいるということではなく、「科学」が発達して、(C)のところを「?」(はてな)にしてしまった結果、妖怪や幽霊など、訳のわからないものが住み着く。「科学」が発達すればするほど、死後の世界、生前の世界を打ち消せば打ち消すほど、妖怪などがますます跋扈し、新手の幽霊が次々に生み出されます。「科学」がこれほど発達しているのに、まだ幽霊や妖怪が居るというのではなく、「科学」が発達したので、新手のモノノケが出現するのです。

来世のために

宗教は、(C)をきちんと、論理的に説明していましたが、とくに「世界宗教」といわれるものは、宗教はそのために生まれたものといってよいかもしれません。キリスト教やイスラームは(A)のところのことはあまり問題にしません、死んだらどうなるかということに関する説明は、精緻に体系づけられており、証拠を突きつけてこれを論破することなどできません。

キリスト教であれば、死んだら魂はそのまま肉体に宿っている、つまり休眠しているが、ある段階で復活して、そこで「あなたは天国に」「おまえは地獄に」ということが決められてしまうという。それまでに安らかに眠りくださいというわけですが、最終的には、神の意志によって、永遠に、福楽の世界である天国に行くか、地獄に落ちるかが決まるのです。全てが神の思召しで、現在の不幸を、主が、自分を救ってくれるために与えた試練、お試しと考えることができれば、これに耐え、「彼」に愛されるような生活をしようという、ひたむきな心構えができあがっていく訳です。

イスラームにしても同様で、死者はアッラーの神による最後の審判を経て、来世において楽園に生を受けるか、永遠に火獄で生きることになるかが決まるとされます。だからどんな苦難に直面しても、アッラーの思召しに従った生き方をしていれば、最終的に救われると信じ、自暴自棄にならず、前向きな生き方ができるのです。

ミャンマーの仏教徒の場合はどうかといいますと、今は（B）のどこかに居るが、やがて死を通過して（C）に行く。すると、（C）が現世となり、（B）は前世となる。そして（C）での死を迎え、来世に旅立つと、それまでの（C）は前世となる。こうして、次々に何らかのかたちで生まれかわっていく。つまり死は、即ち生。現世での死は、来世からみれば生になる訳です。

この死／生を通過するときに、現世で獲得したものは全て置いていかなければならない。自

分の肉体、地位、名誉、蓄積した財、親、兄弟、夫婦などの親族関係、そういうものも全て（B）に置いていきます。そして、次の生を決定するのは、これまで為してきた功德と悪徳のバランスです。功德ばかりをしてきたと確信できれば、現在より苦の少ない所に、もしくは状態で転生できる。来世ではこのような苦勞はしたくない、と思えば、功德をたくさん為さなければならぬ。逆に、悪徳が多くなると、来世は牛や馬になってしまう。下手すると、汚物の中で生きる虫けらとか、さらには餓鬼となったり、地獄の責め苦を受け続けることになったりする。つまり功德Ⅰ悪徳Ⅱ業という等式が成り立ち、死に際して、この差についての個人の意識が、来世の存在を決定するという考え方をします [Nash 1965:106]。

解脱

この業によって来世は決まってしまうのですが、先ほども申し上げましたが、来世と想っていた段階に入るとそこが現世となつて、これまでの現世は前世になつてしまふ。さらにその現世が死を迎えることによつて、前世となるという具合に、結局、これは円環を描いていることになるわけです。図20のように円を死／生の境界で三等分し、右回りでみると、（A）が現世であるとするれば、（B）が来世、（C）が前世になります。そして死／生を経て、（B）の部分に転生すると、今度は（A）が前世、（C）が来世と呼ばれ、（C）に移れば、（A）が来世、（B）が前世であったと理解される。このように死と生を繰り返し、この輪の中をグルグルと回つて

いるという観念が生まれることとなります。

そしてこの円環は、横からみると螺旋状をしており、その人のおこないによって、天のほうに昇っていったり、地に下っていったりしている。先ほど申しましたように、(A)では、この地上に、いろいろな動物や虫や人間のかたちをして生まれたが、功徳をたくさん為した結果、(B)では香りのよい樹木に囲まれ立派な建物がそびえる切利天に転生した。ところが(C)で地上に降りてきて、殺生・偷盜を繰り返した結果、次の(A)では、熱した鉄の縄で縛られ、

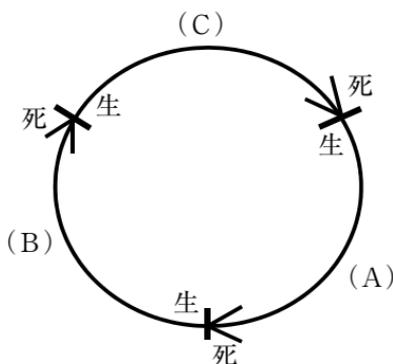


図20 輪廻

焼けた鉄の斧で切り裂かれる黒縄地獄に落ちることに
なってしまう、という訳です。

さらに、この輪のなかにいる限りは、どのようなかたちで生まれたとしても、苦というものから離れられません。たとえ王侯貴族の子として、あるいは天界に生まれても、生まれるときの苦しみは避けようもなく、理想の親兄弟や連れ合いにめぐり逢え、「本当に、幸せだ」と思っても必ず別れがきます。また、例えば、満腹感は数時間も続かない。すぐに空腹の苦しみが襲ってくるように、何せ欲望が満たされ、福楽を感じても、それは一瞬のことにはすぎない。病氣もすれば老いもあ

り、たとえ天界にあったとしても最後には死という苦が控えています。従って、苦から解放されるためには、この円環から外れる必要があります。永遠の福楽の、全く苦のない世界に入る、そうした境地、つまり「涅槃」に達するためには、この輪廻を断ち切らなければなりません。

ではどうしたら、脱出できるのでしょうか。それは、功徳を限りなく大きくする以外に方法はありません。先例があります。仏陀です。修行を積み、いろいろな善行や布施をよくし、徳を次々に増やし、これを限りなく大きくしたことによって、最終的にこの円環から離脱しました。「ジャータカ」にはそのことが、諸種紹介されており、最直近の前世では、ヴェツサンタラ太子として生まれ、自分の持ち物はおろか、子供や妻、自分の目さえもバラモンに寄進することにより、功徳を為すことにはげみます。そして、兜率天に転生し、ここで天寿をまっとうしたのち、カピラヴァストゥ城の太子として生まれ、修行をして悟りをひらき、この円環から離れていきました。

輪廻を断ち切って、もはやどこにも再生しない、永遠の福楽の世界に入って行ったのです。苦とともにある輪廻から解放される、それが「解脱」で、これを果たした釈尊が、そこに至るために自らに課した実践や、その意味について述べた言葉を書き記したものが「経典」で、これは円環から外れるためのマニュアルであると考えてよいと思います。

ともあれ、こうした仏教の世界観に限ったことではありませんが、時間と空間がすきまなくきちんと言明されております。従いまして、先ほど申し上げましたように、幽霊や妖怪が存在

する場所がない訳です。餓鬼となつて出てくるという話がありますが、行き先が決まらないものがさまよい、どこかに住み着き、またなぜそこに住んでいるのかもわからないが、現世の間を脅かすという存在について、上座仏教的考え方では論理的に説明できません。

祖先崇拜のない世界

ミャンマーの仏教徒から聞いた笑い話の中に、日本では、とても成立しないようなものがあります。お父さんが死んでしまった。しばらくして、家族はどうしても、もう一度父親に会いたいと思い、祈禱師のところに行き、「お父さんは、今どこに居るのか」と尋ねます。そうすると「お父さんは何々県何々郡何々村の何とかという人の飼っているブタに生まれています」という答えが返ってきました。そこで家族が会いに行く訳です。

確かに何々県何々郡何々村にその人は住んでおり、ブタを何頭か飼っていました。事情を話すと、お父さんが死んだころに生まれたブタがいるという。案内してもらい、小屋の方に行くと、一頭のブタが走り寄ってきた。家族のほうも、このブタには何かお父さんの面影があるように思い、「ああお父さん」という訳です。「非常に懐かしかった」。「ブタのほうも目が潤んでいた」。帰るときに、「じゃあまたねといったら、ブタは振り返り『ブー』と応えてくれた」。とても日本やヨーロッパではできあがらない話ですが、仏教的世界観のなかでは、信じるか信じないかの問題です。

こういう訳ですから、「遺骨」という観念がありません。現在ミャンマーといわれている土地では、戦時中一九万人の日本人が死んでいます。戦後、戦友やご遺族が中心となり、厚生省（現…厚生労働省）援護局やミャンマー政府の援助のもと、戦没者の遺骨を収集するという事業が何回ありました。魂を故郷に連れて帰る、という趣旨です。しかし、ミャンマーの仏教徒には、それがわからないのです。なぜ抜け殻を拾いにくるのかと。その人はとっくの昔どこかに再生して、別の歩みをしているのだから、遺骨は単なるリン酸カルシウムの集合体にすぎないのに。

たしかにあの人たちも人が死ぬと、遺体を墓地に埋葬します。それは、そのまましておくと腐敗し、ウジが湧いたりして非衛生的だからというのが、その主たる理由です。死体を埋葬する場所は村の外にありますが、一度埋めてしまえばほとんど顧みません。草が生い茂つたり、墓の構造が崩れ、中の骨が見えたりしていようがお構いなし。とうぜん日本で見られる年忌法要などありません。祥月命日とか、お盆、正月などにお墓に出掛けて行き、掃除をしたり、そこから先祖の霊を家に連れてきて、今度は送り火をたいて帰したり、ということもありません。お寺に墓地はありませんし、お坊さんが、法事をリマインドするようなこともしません。

つまり「祖霊（先）崇拜」というものがないからです。先ほども申し上げましたが、自分がこうして存在しているのは、また来世を決定しているのは何かというと、前世や現世におけるその人のおこないです。ですから、自分の身に起こることは、全て自分が種をまいたのだという考え方です。誰かの行為によって現在の自分があるわけではありません。江戸のおわりから明

治にかけて、三遊亭円朝という、怪談噺の傑作を書いた人がいますが、その中に「親の因果が子に祟り」という、ゾットする言い回しが出てきますが、上座仏教ではそういう思考はめぐらせません。親の因果は親に「祟り」、子の因果は子に「祟る」。

たまたま、現世でこの親のもとに生まれ、家族が形成されていく。兄弟親戚にしても、今の世でたまたまそのような関係になっただけで、この段階で恩は受けますが、その前の祖父、曾祖父とか、その前の祖先が自分の現在を決定しているのだという考え方はしません。何らかの恩義を過去に受けているかもしれませんが、それは現在他人として暮らしている人たちに對してもいえることです。系図を作って祖先としてこれを認定し、排他的にこの人たちを特別視することはしません。これは何々家の墓がないことに示されています。日本においてこうした墓は、祖霊崇拜や「家」制度と密接に結び付いた考え方に発していることは誰しも認めているところで、これが「普通」であると思っております。

「家」の觀念がないので、名前に、イトウとか、ヤマグチとか、日本でも明治時代になって、庶民も明示することが決められた「姓」がありません。通常ビルマ人の名前は、二〜三音節で成り立っています。ストカキン・チーとかアウン・サンとか。名前にはめでたいもの、貴重なものとか美しいものを示す語が用いられますので、同じ名前の人によく出合います。最近では、これでは具合が悪いということからでしょうが、四〜五音節（例えばアウン・サン・スー・チー）という長い名前の人にお目にかかるようになりましたが、この場合でも、その一部が同

一家系であることを示すということはありません。

ですから、結婚すると名前が変わることを問題視する、夫婦別姓の議論などがありません。そういう点では、こうした問題に苦しむ日本女性にとつて、「先進的」な都合のいい考え方です。ある女性の話ですが、絶対に姑とは同じ空間には入りたくないということで、墓のなかに仕切りを設けたいという。なぜこのようなことが起こるかといえば、家制度があり、そして先に述べましたように、骨の中にまだ魂が宿っているという考え方があるからでしょう。

前世の因縁

でも、その魂はいつたいどうなるのでしょうか。柳田國男などは、それが何十年か経つと先祖霊となつて全てが一体化し、ついには山の神になつて、共同体を守る存在になるといふような、非常に無理な考え方をする訳です。釈尊は、そうした単線的な、いつのまにかうやむやになるような、究極的にどうなるか分からないような説明ではなく、より現実的明示的に、自業自得の理を解きました。

先ほども申しましたが、結局、これで何を説明するかというと、心に平安を、社会に安定をもたらし生き方があります。「人間は生まれたときは、みんな同じスタートラインに立っている」とよくいいます。しかし、これは嘘だということはみんな知っています。どこに生まれたのか、誰のもとに生まれたのかによつて、人生は半分ぐらい決まっているといつてもよい。教師は、「み

んな、同じスタートラインに立っているから、あなた方の努力次第で、人生はどうにでもなるのですよ」というのですが、なかなかそうはなりません。人生経験の浅い若い人でも、生まれた時にすでに差がついていると思っております。

そうすると、「なぜ、私はこの親のもと、このような境遇に生まれたのか」が問題になります。隣の子は、お父さんもお母さんも優しく、裕福で、子どもの考え方に理解がある。ところが、うちの親は飲んだくれで、母親に暴力を振るうし、お金はいつもない。だから、中学を卒業したら働かないといけない。格差社会の底辺に沈み、社会からも爪はじきにされる。どんなに努力しても這い上がれない。ともすればなげやりな生活を送ってしまう。

「なぜ自分はこういう目に遭うのか」というときに、仏教では、「それはあなたが撒いた種なのだ」と説明する訳です。周りが悪いからではありません。「あなたが作った業でそうなっているのだから、自分でそれを引き受けないと来世も浮かばれませんよ」となるわけです。ですから、ここで「きちんとした生活」をしなければ駄目です、となる。そういう考え方をしないと、親が悪いから、社会が悪いからということになり、自暴自棄になってしまい、これを社会構造の問題として理解した場合でも、前向きに生きることができません。「どこに生まれるか、誰のもとに生まれるかで一生は異なる」、このことほど人間には前世が存在することを証明しているものはありません。

ここが仏教やヒンドゥー（バラモン）的な考え方と、キリスト教的、イスラーム的な教えと

は決定的に異なるところです。つまり、全知全能の神が存在していて、それが自分たちの一生や生き方をコントロールしている、決めてくれている。ある場合には、神が手を差し伸べて救ってくれる。いま逆境にあつて、苦しみのどん底にあるのは、神が自分をお試しになっているのだ、だからこれに耐えれば、天国に再生できる、という確信をいだく。そして、神に認められる方は、神父や牧師やウラマーが教えてくれる、とはならないのです。

では、仏様をかたどった像のところへ行つて、また仏舍利を祀った仏塔をつくつて拝んだりしているのは何だ、ということになります。「明日試験があるから、どうか私にお力を」と祈っているのかというと、そうではありません。そこでは、釈尊に向き合い、その善行を偲び、あのようなおこないをしたことよつて、仏様は現世の苦しみから解き放されて、涅槃の境地に入られた、解脱された、という理解のもと、それに自分のおこないを照らして、自省しているのです。それは釈尊の教えを介して自分自身と対話をしているといつてよいと思います。決して「すみませんお賽銭はこれだけです、宝くじが当たりますように」という訳ではないのです。釈尊は神ではなく、偉大なる教師なのですから。

超自然的な存在にすがり、その力によつて窮状を救ってもらふ、苦しみから解放してもらおうというのではありません。上座仏教徒の祈りは、自分のおこないを反省して、「五戒のうち、今日はこれとこれは守れたが、これとこれは守れなかった、明日はきちんとした生活をしよう」とか、「自分の強欲を、明日は出さないようにしよう」というようなことを、瞑想しながら仏様

に約束することによって、肝に銘じているのです。そういう祈りの姿だと思えます。全知全能の神に、何かを救ってもらいたいと頼んでいるわけではありません。これが、他の宗教と、根本的に異なるところです。

三 実践——功德を為す

では、「きちんとした生活」をするには、いったいどのようなことに気を付ければよいのでしょうか。苦から最終的に解放される道とはどのようなものでしょうか。

業によって来世の存在が決定されるとなれば、現世において功德をできるだけたくさん為したいと、誰しも思うでしょう。金銭も、名声も、周辺の後ろ盾も、来世の存在を変えることはできません。ですから現世では、最終的に功德を為すしかありません。これをできるだけ大きくして、来世に望みをつなぐのです。

ただこれは、死んだ後のためだけに訳でもありません。因果応報という考え方は、明日、これから先という、現世での近い将来も射程に含まれます。今、困ったことが起きたのは、大変な目に遭っているのは、あの日あの時の所業に因るものであると考えると考えてしまうことはありませんか。生死の区切を基準にするのではなく、もっと身近なところで起こる因果応報の理を考え

て、自分の行動を考えてしまう。「あの時あんなことをやったから、こういう罰が当たったのだ」とつい。心のなかにある疚しさによるものでしょうが。

五戒の遵守と寄進

そこで、功德を為すためには、まず「五戒を守りなさい」と教えられます。五戒とは、日常生活のなかで、殺生をしない（不殺生）、人のものを盗まない（不偷盜）、不倫をしない（不邪淫）、嘘をつかない（不妄語）、酒を飲まない（不飲酒）、というこれら五つの規範をさします。私有財産制や家父長制を基本とした社会における、秩序維持のための基本的な決まり事といつてよいでしょう。しかしこれを全て、完全に守ることは不可能に近い。特に不殺生や不飲酒は。

酒を飲むと理性のコントロールが効かず、あらぬ事を口走ったり、おこなったりします。酒を飲む前は、絶対に車の運転などしなさいと思っても、酒が入るとその誓いはどこかにいつてしまいます。飲酒運転は、酒を飲むことを許している限りはなくならないでしょう。正気のときにはしなさいと思っても、酒を飲むことによつてそれは御破算になる。酒は人を狂わす、故に飲んではいけないとなるのですが、ともあれこの五戒を守れば、自分の心を平安に保つことができ、悪因悪果から逃れることができ、悪徳を為したという思いはなくなるでしょう。

しかし、功德を目に見えるかたちで積みたいたいということになれば、それは「寄進」、つまり「施し」をおこなうことです。これには、（1）仏塔や窟院の建立、（2）得度式を主宰する、（3）

僧院建立、(4) 僧院への井戸または鐘の寄進、(5) 僧への食事の寄進、(6) 僧への布施、(7) 俗人に対して物やサービスの提供、という方法があります。ミヤンマーの農村調査をやったナツシユという人の観察によれば [Nash 1965:116]、(1) がもっとも多くの徳が「獲得でき」、(2) (3) となるにつれ、その量は少なくなっていくと考えられていたようです。

(1) は一度に多くの功德を為すことができますが、莫大なお金が必要です。ある場合には、私財をなげうたなければなりません。王国時代、これができた人は、仏塔施主（男性であればパヤー・ダガー、女性であればパヤー・ダガマ）の何々さんというように、名前の前にこのような称号を付けて呼ばれていました。高い徳を有しているとみなされたからでしょう。大金をはたいて、メッカに巡礼した人に、ハジの称号が贈られるのと、似ている気がします。仏教の場合、釈尊と身近に向き合える場を人びとに提供する訳ですから、当然でしょう。

(2) の得度式も、またお金がかかります。自分の息子や、ある場合には近所の子供もいっしょに、短期間であれ沙弥として修行させるために、僧院に入れる儀式を主宰することがこれに当たります。九歳とか一〇歳になった男子に、一時的であれ僧院で修行する機会を提供してやる。太子だった釈尊が、城を出て出家したことにちなみ、子供に王子さまの格好をさせ、賑々しく王朝絵巻のようなパレードをして僧院に行き、そこで剃髪し、仏門に入れる。その時人を招いて、盛大なおふるまいをします。当然、衣装代や馬車のレンタル料なども含め莫大な出費となります。豪華なパレードや供応であればあるほど、多くの功德ができることは間違いありません。

次に(3) 僧院の建立。これは、お分かりのように、お坊さんが止住し、修行する場所の提供です。普通の家とは違い、建設には相当なお金が必要です。それから、(4) 僧院への井戸や鐘の寄進。このあたりになると日本でも見られます。そして(5)(6)(7)は、同じお金やおふるまいでも、僧侶にするのと俗人に対するものとは、前者のものがより多くの功德ができるということです。たぶん現実世界での物的な見返りが期待できない施しの方が、より多くの功德になるという考え方からきていると思います。

この点について、仏教徒の知り合いに尋ねたことがあります。もし家の前に、托鉢の僧と哀れな乞食が立った場合、どうするか。答えは瞬時に返ってきました。迷わず、お坊さんに食事やお金を差し上げるといのです。物乞いは前世の因縁でそうやっているのだから、哀れではあるが仕方がない。それよりも、修行に励んでいるお坊さんに寄進した方が、自分の功德になるということです。

三衣一鉢

こうして見てきますと、功德を為すという行為の最たるものは、全て仏教施設や僧侶に絡んだものであることがお分かりいただけだと思います。宗教施設やお坊さんに、「寄進」ということで金銭を投入すれば、功德となる。何だか、下心がみえみえ。坊主丸儲けではないか。私などはさもしいほうですから、そう思ってしまう。「これは仏教僧が仕組んだ罫ではないか」

と。

ところが、上座仏教といえますか、元来の仏教ではそうであったと考えられますが、僧侶と
いうのは、物を所有してはいけません。日本でも、お寺の建物や敷地は和尚さんのものではなく、
宗教法人のものです。ただ住職の多くは、これとは別に動産や不動産を所有し、結婚して家族
も持っていますか。しかし本来は、「三衣一鉢」といって、三枚に分かれた袈裟と、托鉢する
ための鉢だけが、彼らの私有財産です。

袈裟は、糞掃衣と称され、塵芥にまみれた布切れをつなぎ合わせたもの。鉢は、生産活動に
従事、つまり殺生はしませんので、在家から齋飯を受けるためのものです。あとは、衣を繕う
ための針と糸とか、水を飲むためのコップや、混じった生物を取り除くための濾し器程度です。
それ以外の物品は、所有できないことになっています。お金に触れてはならないというのが原
則で、銀行口座なんかとんでもない話です。

従って、功德を為すために(2) (6)がおこなわれても、お坊さんが「儲かる」という
ことはなく、ただ僧侶の修行する環境が整うにすぎません。これによって徳の高いお坊さんが
生み出され、在家が導かれるのですから、最終的には誰のためかといえば、人びとのためとい
うことになります。

通常の贈与であれば、それが何らかの形になって返ってくる訳ですが、お坊さんは財を有し
ませんので、そのようなことは期待できません。結局、精神的なレヴェルでの返礼が期待され

ているということになります。従って、寄進や布施は、ただ物財が消費されるだけということになり、新たな財を生み出す元にはなりません。わらしべ長者のようにはならない。(1)の仏塔や窟院は、これを施主が独占する訳ではありませんので、先ほども申し上げましたとおり、皆のため、いわば公共の施設となっけていきます。

質素な生活

出家すると二二七の戒を守らなければなりません。つまり五戒プラス二二二戒ということになります。ここには、頭を丸めることからはじまり、結婚しない、装飾品をつけない、豪華な寝台に寝ないなど、いわば日常生活を律するさまざまな規則が定められています。物を食べるときに音を立ててはいけないというのも入っています。何しろ二二七もありますので、一挙手一投足に縛りがあるとみてよい。それが定められた一つ一つの意味が理解できなくても、まずはこれに従う。そうすれば次第に心が落ち着き、清浄になって、宗教的覚醒に近づく。理屈より、まず形からはいる。⁽⁵⁾自堕落な生活を送っている者が、早起きし規則正しい生活をはじめると、次第に心が落ちつき、澄み切っていくのと同じです。「戒」があるので、それを守ってこそこの比丘なのです。比丘尼の場合には、先ほど、この世には存在しないといいましたが、「戒」が三三一もあります。仏教のジェンダー観が見て取れるといわれますが、本日は、そこは触れません。

繰り返しますが、この「戒」に照らして、お坊さんの所有物は三衣一鉢ということになる訳です。午前中の托鉢で受けたご飯を、一〇時半とか一一時ごろに食べます。そして、一二時を過ぎたら、次の日の午前までいっさい固形物は口に含まないことになっています。水やジュースなどの流動物はいいのですが、固形物は駄目です。搾りたてやつぶつぶのジュースがありませんが、これも駄目。飲む場合には、菌を食いしぱり、これをフィルターにして液体の部分だけをのどに通す。その後、水で口の中をゆすぎ、菌の間を通らなかつた搾りかすや繊維とともに吐き出す、というように徹底しています。

衣もどんなに偉くなるうと、どんな儀式の席であろうと、糞掃衣です。偉くなるというのは「法臘」といって、出家して何年かによって序列が決まることに由来します。「緋の衣を着た高僧」などという考え方はありません。大乘仏教は着ているものを見れば、偉いお坊さんかどうかがすぐに判るようですが、上座仏教の世界では、不可能です。修業期間の長短が問題になりますので、例えば、五〇歳になってから出家し、まだ五年しか経っていない比丘は、二〇歳で出家して一〇年経っている僧侶からすれば、まだ若僧です。五五歳のほうが、年を取って、人生経験もそれなりに積んでいるようですが、お坊さんの世界では、出家した期間が短いということ、上下関係が決まっています。

面白いことに、お坊さん同士が出合ったときには火花が散って、「こいつは法臘何年か」とお互いに探りをいれる。外見ではわからないからです。そして遂には「あなたは出家して何年か」

とどちらかが聞く。「俺は何年だ」ということになる、「ああ、それだったら、私の方が下で、あなたのほうが上だ」となります。座っている位置がパッ入れ替わり、若い客人であろうとも、長くお坊さんをやっているれば上座に着くことになり、言葉遣いも変わります。私は、お坊さんと旅しているとき、このような場面によく出くわしました。ちなみに、普通のホテル、つまり俗人が宿泊するような所などには、泊まりません。だいたいは、僧院が在家の家です。

公共事業

何しろ、お坊さんは物に囲まれたり、財産を蓄積したりすることはできません。寄進で、「お寺がどんどん太っていく」などと我われはいったりしますが、そういう罰当たりなことはない訳です。では、寄進とは何かということになります。これを、先ほどみたバガン時代の碑文で考えてみます。そのなかに、宗教施設を寄進するについて、これだけ費用がかかったという明細を記しているものがあります「伊東1976：三四九～三四五」。

この寄進文には、ある大臣の妻が一二三六年、窟院と僧院を建立するについて、支払いに応じてその都度、モルタルにいくら、煉瓦にいくら、各種木材にいくら、その運搬費にいくらとか、かかった費用が実にこまごまと記されています（表1）。全ての碑文がこんなに詳しいかといえ、ただ総額だけのもの、費用については何も語らないものもあります。しかし、仏塔や窟院を建設するとなると、その規模にもよりますが、だいたい同じような内容になるでしょう。

かじ屋に	(銀)	4	テイカル
窟院の彩色師に	(銀)	7	テイカル
垂木の購入のため	(銀)	7	テイカル
木彫師に	(銀)	30	テイカル
モノリスの費用	銀	3½	テイカル
牛5頭のため	(銀)	20	テイカル
粉の購入のため	銀	5	テイカル
蜂蜜 22 タナク の費用	(銀)	77	テイカル
牛乳 24 タナク の費用	(銀)	25	テイカル
モルタルの費用	米	320	(緋斗)
石レンガ 300のため	購入米?	30	(緋斗)
石工のため	購入米?	140	(緋斗)
左官のため	購入米?	45	(緋斗)
ちょうな師と木彫師に	購入米?	20	(緋斗)
米 4 緋斗で	(銀)	1	テイカル
(米)の運搬のため	銀	38	テイカル
窟院の尖塔に要した賃金	銀	10	テイカル
鉄の費用	銀	10	テイカル
窟院に用いた各種材木の購入のため	銀	20	テイカル
材木の運搬費として	銀	10	テイカル
左官に	銀	20	テイカル
水銀職人に	腰布1, 腰ひも1		
左官に	腰布1, 腰ひも1		
大工30人に	腰布30, 腰ひも30		
荷車賃借り代	(銀)	22	テイカル
ちょうな師の賃金	銀	10	テイカル
ピンロウの実1356	銀	2	テイカル
白布一反	銀	1	テイカル
.....		

(途中一部省略)

表1 寄進明細

鍛冶屋とか、彩色師とか、木彫師とか、蜂蜜とか牛乳とかピンロウの実とか、これらはおふるまいに使ったものかもしれません、いわゆる人件費もあげられています。

この明細は何を意味するのか。仏塔や窟院の建立をおこなうことができる者は、当時の支配階級に属する者、つまり、国王とか王族、高官などですが、この人たちが私財をはたいてこうした事業を遂行していたこ

とがわかります。たぶんその原資は、住民から収奪した税金であったり、支配下にある小国からの貢納であったり、交易の独占によって得られた利益であったと思われるが、こうしたものを使って、壮大な宗教施設が建設されたのです。

私たちは、古代のしかもアジアの巨大建造物といえば、ただちに、専制君主が住民の強制労働によって、もしくは賦役によって、やせ細った住民を鞭でかりたてて造り上げたに違いないと想像してしまいます。しかし近年では、あのピラミッドも建設作業員には給料が支払われ、

彼らは病気で休むこともできたことが明らかにされています。住民を奴隷として扱った残酷非道な「アジア的専制君主」というのは、どうもヨーロッパの哲学者や歴史学者が作り上げたイメージのようですが、バガン王国でも、こうした碑文の存在から、職人や作業員に賃金を支払い食事を出し、資材にたいしても費用がきちんと支払われていたことがわかります。

それはそうでしょう。自分が救われるためにおこなう宗教行為が、他人の肉体を犠牲にしたのでは、効果がないことは誰しも考えることです。一応、税金のかたちで、住民が生み出した余剰を収奪するが、この富を使って、仏塔や窟院を造る。もちろん自分の権力を誇示する目的もあったでしょうが、この施設は自らに安寧をもたらすためのもので、よしんばこうして得られた人望を手段に、また新たな収奪を試みても、限度があります。

先に述べたように仏塔や窟院の場合はその維持管理費をまかなうために、寺院を建立したときは、ここで修行する僧侶のために、田畑や村の寄進もおこなわれました。つまり、そこから納入されていた税金が、僧侶に修行を遂行させるために使われるのです。釈尊を身近に感じる壮大な施設を建てたり、その教えを実行する僧伽（比丘の集団）の繁栄を企図したりすることは、一般民衆のためにもなったに違いありません。

つまり、大規模な宗教施設の建設は、公共事業のようなものです。現在でも、我われが納めた税金を使って道路やダム、港湾施設、ハコモノなどが造られると、建設業界が潤い、これがいろいろな分野に波及します。雇用が確保され、お金が回って経済が活発になっていきます。

それと全く同じことが起こっていたはずです。レンガの生産者、運搬を請け負う者、農閑期の農民、職人へと富が流れ、生活が活性化されていく。

物欲から離れる

現在でも、仏塔が建設されるとなると、莫大な資金が必要になる。商売や事業がうまくいってお金をたくさん持っている人でも、だんだん死が近づいてくると、来世にはお金を持っていないので、これを功德に変えようとする。それは、仏塔や僧院の建立、お坊さんに寄進をすることなどによって可能となる。また私財を放出し、仏教の繁栄に貢献すれば、人びとの信頼を勝ちえ、これによって商売がうまくいくということもある。しかしそれとて、蓄積した富は、来世に持っていけない。

先に申し上げましたように、我われの感覚からすれば、仏塔や窟院を建て、これに大金をつぎ込んでの維持・管理など、無駄なことこの上もありません。宗教施設に投資をしても、お坊さんの儲けにもならないし、これが新たな利潤を生み出すこともありません。つまり、功德を為すために、獲得した富を投資するのですが、それによって、物質的にですが、さらに豊かになるということはありません。宗教に投資したがために、それが価値を生み出して大きなものとなって返ってくるという訳ではないのです。いわば単純再生産の世界にすぎない。結局、自分や縁者の死後における安寧を願ひ、いろいろなものに寄進する(廻向)ということとは、物欲

を断ち切るという尊いおこないを実践していることになる訳です。

四 来世を介した格差是正

他人のお金で寄進をしても、それは功德にはなりません。身銭を切ることが大切なのです。苦の根源である、欲を断ち切るための仕掛けは、仏教の専売特許ではなく、他の宗教や信仰の世界観のなかにもあります。この点での共通性を描き出そうというのがこの講座の趣旨ですが、その意味を考えるうえにおい、こうした「世界宗教」を取り入れていない、いわゆる「部族共同体」の事例は、その手がかりを与えてくれます。こうした社会では、その見返りを求めることなく、特定の個人や家族が成員に対して、きわめて巨額な贈り物や供応をすることがありました。

財産をいっきよに使い果たすという、経済的にみれば単なる浪費であつて、饗宴の主体が勢力を拡大するためというより、当該共同体の秩序を維持するためにおこなわれる。もちろん、それによって、例えば古代ローマ世界における「パンとサーカス」のように、その本人の地位は盤石のものとなるのですが、そうした現世での損得勘定でおこなわれるものではありません。⁽⁶⁾

カチンのマナオ

ミャンマーの中央部は多数の仏教徒が住んでいますが、周辺の山岳地帯には、これとは違った信仰を有する人たちが住んでいます。そのなかにビルマ語でカチンと総称される、いわゆるマイノリティー集団が、主として北部地域で、焼き畑や水田耕作、狩猟採集により生活しています。植民地期以降は、かなりキリスト教への入信がすすみましたが、それまではいわゆる精霊信仰に根差した生活をおくっていました。

日常の儀礼や、時々のお祭りも当然こうした信仰がつくりあげた世界観に基づき、山地社会の秩序維持のためにおこなわれていました。そうしたもののなかの一つに、「マナオ」大祭がありました。過去形にしたのは、現在でも州の催しとしておこなわれているようですが、意味が当時とは異なっているように思えるからです。

在来の、といっても二〇世紀後半の観察による話⁽⁷⁾ですが、祭りの本番はドゥムサーという祭司による祝詞からはじまります。その後、踊りの会場となる広場の中央にマナオの柱が四本立てられ、これがこの祭りの大きな特徴です。そのうちの三本には大河の流れを表した渦巻紋が、もう一本には財を表す菱形の幾何学模様を描かれます(図21)。柱は天と地を結ぶもので、降臨した、世界中の財を司るマダイという精霊の依り代になるといふ。

初日の夕方、周辺の村々から人が集まってくるのに合わせ、ジョイワー(語り部祭司)によって祭主がこの祭りを催す次第が語られる(図22)。そしてジョイワーの後に従って、祭主一族が



図21 マナオの柱 (吉田敏浩氏撮影)



図22 ジョイワーによる祈願 (吉田敏浩氏撮影)

踊りの場所に入り、これを一周する。その際祭主の妻は、財の籠とみなされる、中は空っぽの竹籠を額から背中につるしているそうです。この籠にはジョイワローが唱えた、白米、サトイモなどの作物やニワトリや豚など全ての家畜、川で採れる砂金などが、この祭りの結果として、入っていくと信じられていました。

二周目からは同族以外の人も加わり、三周したあとは、皆祭主の長屋にはいり、ジョイワローの語りに耳をかたむける。この祭司は、自分の魂が川や峠や山にそってすすみ、天に昇ってマダイの御殿に至り、その一家を誘って、やってきた道をたどり、帰ってくるまでの仔細を語る。マダイ夫妻と娘息子は財を携えており、それが到着したことを知ると、参加者はこれを祝して踊りだすそうです。外はもう二日目の昼になっており、水牛が屠られ、



図23 踊りのはじまり (吉田敏浩氏撮影)

マナオの踊りが始まる(図23)。祭主の一族を先頭に、男女二列に分かれ、マナオ柱を中心に、銅鑼のリズムに合わせて左回りに練り歩き、このカミを讀えるしぐさで舞う。祭主夫妻は一周して退場するが、踊りは続く。

祭主の家では、ジョイワーが宇宙の生成、天地開闢から、この家系の現在にいたるまでの壮大な物語を、カミ棚にいるマナオに聞かせるために語り始める。これには一昼夜を要し、三日目になると、人びとの踊りで広場はたいへんな賑わいとなる(図21)。この間、参加者には祭主の家から、朝夕の食事と濁り酒がふるまわれた。生贄の肉は、その大半がこうして消費されていく。歌と踊りによる祝宴は最終日まで続き、その夜、豊穣の祈願を終え、全ての精霊を見送り、祭主に災厄をもたらず精霊を追放する儀式を最後に、この家が財に恵まれることを祈って、祭りは終わる。

マナオの祭りは、豊作と子孫の繁栄、無病息災を天の精霊マダイに祈願して、四日間続きます。おふるまいの食事や酒、会場設営などにかかる費用は全て主催する個人が負担します。みんなでお金を持ち寄って催される訳ではありません。ここで紹介したマナオの主催者はンボム・シンワーという人で、氏族首長の家柄に属し、二〇数年前、父親の代に催されたものを、自分も挙行したいという希望をもっていたようです。以前であれば氏族首長という地位により富を蓄積することができたと思われませんが、この当時はそうした制度も廃止されていました。この人はなんでも砂金の採集でかなり財をなしたということです。

この村は二八世帯、一五〇人程度の集落だったそうです。しかし、このような祭りをすると、数百人の来客があり、水牛、牛、ブタなどが生贄とされ、その数は二〇頭を越える。お酒もふるまわれます。何度もいいますように、費用は祭主個人が全て負担します。ある意味、祭主の蓄えは底をつくことになるでしょう。財の籠にマナオがいろいろな財宝や福楽をもつてきてくれるとはいいますが、それは想像上の出来事にすぎません。現在持っている富を全て人に分け与えるかたちになるので、これによって威信が上昇することがあっても、経済的には無一文なつてしまう。ここには、富を放出することにより、自分や家族にさらなる福楽がもたらされるという理解があり、これが精霊という、あの世の存在との関連で説明されていることがわかります。

ロンユー

カチンのいる山地の西部に、これまたビルマ語でチンと総称される人たちが住んでいます。このチンの中に、ムイン・チンと呼ばれるグループがありますが、その中でおこなわれるお祭りのなかで、ロンユー（石曳き）というものがあります。これは非常に奇妙な儀式⁵⁶で、かつて日本のテレビ番組でも何度かとりあげられました。

この地に暮らす人びとの村は、山の尾根の上にあります（図24）。その一軒の家へ、つまりこの儀式の主催者の家へ、深い谷底から、一トンにも達する大きな岩を人の手によって運び上げ

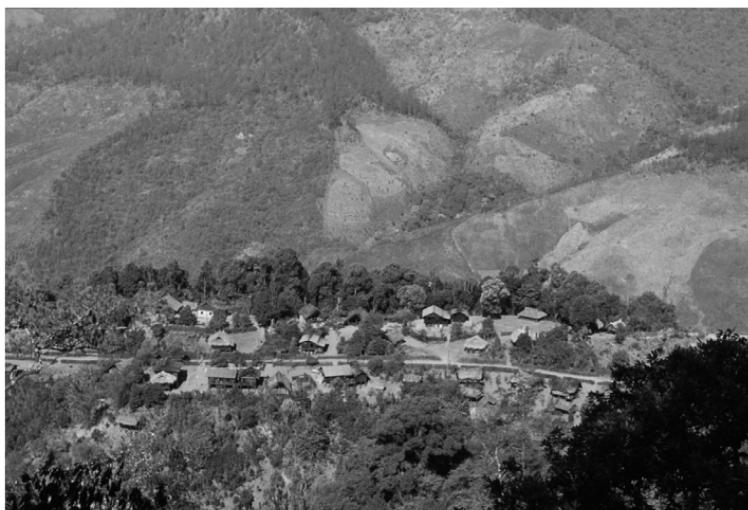


図24 チンの村（後藤修身氏撮影）

るといふものです。ある場合は百人以上がこれに参加し、一致協力のもと、竹を燃って作った縄を岩にかけ、梃子やコロを利用して、引きずったり滑り落としたりして、高い尾根の上にある家までもつてくるといふものです（図25）（図26）。何か精霊のお祭りに合わせて挙行されるといふのではなく、おこないたい人名乗りをあげ、これが長老たちに承認されればよい。

儀式はまず石の選定、森の中に放し飼いにしている牛の捕獲、そして酒の仕込みからはじまります。重機などを使わず、しかも道が整備されている訳でもないと、人の手だけでこのようなことをするので、ある場合には一週間もかかることがあるという。通常農閑期におこなわれ、だいたい村人総出となるようです。岩が無事引き上げられ、主



図25 石を梃子で動かす (後藤修身氏撮影)



図26 石を曳く (後藤修身氏撮影)

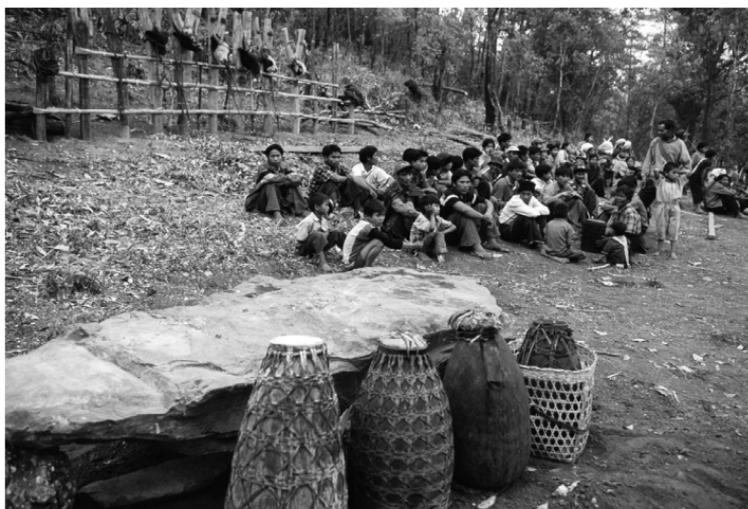


図27 曳きあげられた石の前にならぶ酒壺（後藤修身氏撮影）

催した家の庭に運び込まれると、その前に酒壺が並べられ（図27）、事前に捕まえておいた牛や、それに鶏などが料理され、飲めや歌えの宴会がはじまる。この饗宴は何日も続き、儀式というか祭りは終わる。

要は、尾根の上にある家のところに、谷底から石を曳きあげるといふものです。ただそれだけです。この石に霊力が宿っていて、その後この家を繁栄に導くとか、何かの建築資材にするというわけではありません。ただ大きな一枚岩を、村人総出で何日もかかって曳きあげるだけ。石そのものに価値はありませんが、こうした祭りを主催することに意味があるのです。石曳き儀式を七回主催すると一人前の男になる、それをおこなわないと地獄に落ちるといふことがあるらしいのです。

この期間中昼夜を問わず、主催者は参加者



図28 食事の供応（後藤修身氏撮影）

全員に食事と酒をふるまう。この人の家の財産である牛が何頭も屠られ、みんなに供されるわけです（図28）。主催者が、食事、財産である牛を提供し、酒をふるまうという点ではマナオと一緒にです。主催する人はそれだけの財力がなければならず、それまでに蓄積した富を、この儀式で、ある意味全て使い果たしてしまうことになるでしょう。それも七回もしなければならぬとなれば、財の蓄積など不可能に近い。もちろん、そうすることで、その人は社会的な威信は高まっていくが、経済的には無一文になる。しかも、その放出した富が、利潤を生み出すこともありません。

それでも石曳き儀式に手を挙げるのは、現世のみならず死後の世界において、こうした行為が報われるという考え方があるからでしょう。チンの人たちの間では、狩猟や供犠

の数、例えば、四頭の牛をしとめ、これを入びとにふるまうと、来世は四頭の所有者になれるという考え方がある〔瀬川 2008：二二一～二二二〕ようです。また沢山のコマを収穫し、これを他人に提供すれば、葬儀の際には特別の榮譽をうけることができる〔エーエー 2011：五九一～五九二〕ともいう。

以前首狩りがおこなわれていたところは、獲得した首の数だけ、来世では奴隷を所有することができると思われていたようです。逆に、これができなかった者は地獄へ赴くと。また狩猟によって牛などをうまく捕まえた人は、自分のものにせずに、宴会を開いて、みんなに振るまう。そうしないと、あの世で罰を受けるということです。

また写真家の後藤修身⁹⁾さんが、ムイン・チンの友人から聞いたとして、次のような話を教えて下さいました。人は死後、黄泉の王であるモーヌーウエと会う。モーヌーウエは死者に生前何をやっていたかを尋ね、それにより次に行く世界を死者に指示する。善きおこないを為した者は善き者たちが住む世界へ、悪しきおこないをはたらいた者は悪しき者たちが住む世界へ行くことになるという。ル（ロ）ンユーは善き行いなので、死後は善き世界へ行く可能性が高くなる、とのこと。

つまりこうした祭りや儀式は、瀬川正仁さんも書いてるように、「社会に偏在しがちな富を絶妙なさじ加減で再配分する、社会の潤滑油の役割を果たして」〔瀬川 2011：六一四～六一五〕おり、ある意味「『公共事業』のような役割を果たしている」〔瀬川 2008：二二一〕といつてよ

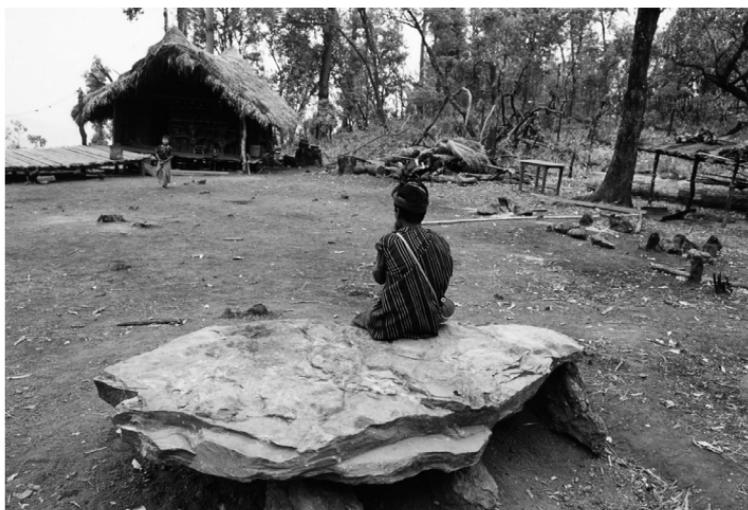


図29 祭りのあと（後藤修身氏撮影）

いでしよう（図29）。いったんは富の格差が生じるが、個人にとって大問題である死後の世界あるいは精霊の世界との関係で、現世において、これが是正されていく。もともとというか、普遍的にというか、そういうメカニズムを、人間社会はつくり出していたのではないかと思われまます。

「蕩尽」の定式化

仏教の場合、世界観の精緻な理論化により、このメカニズムが純化されているとみてよいでしょう。一つの共同体や政体において、その構成員間に経済的格差がひろがると、社会環境が悪化し、人びとの安寧な生活が脅かされるようになります。一部の住民がその経済力をつかって他者を支配し、その人が生み出した富をさらに収奪・搾取するということ

が社会の基本となるに違いありません。これは現代日本の状況からも容易に想像できるところです。

そうならないために、莫大な富を集積している人から、これを強制的に奪って貧者に振り分けるのではなく、その人がいわば自発的にこれを社会に還元（配分）するということになれば、社会は限りなく安定に向かうでしょう。仏塔や寺院の建立は、その施主にとつてそれ自体あらたな財や商品を生み出しません。またお坊さんへの布施は、彼らは何も持っていないので、贈与論的にみて「モース 2008」、その見返りを期待できない。つまりこれらは経済的にみれば、浪費、蕩尽にすぎませんが、富は再配分され、格差は是正されていく。仏塔や寺院は生産財ではありませんし、お坊さんに布施しても、相手が俗人であれば返ってくるような、贈与の反対給付もありません。何しろ、お坊さんは何も持っていないからです。ここがマナオやロンユールと異なるところです。

こうしたメカニズムを作動させるために、功德という観念が構想されたとみることもできるのです。上座仏教は、いっけん個人の解脱のみを志向した矮小な思想とみられがちですが、その思想には現世における人間社会を安定をもたらす仕掛けが隠されている、と見ることはできないでしょうか。

寄進とは、死の苦しみ、そして死後の存在にかかわる不安を克服するために、自分が集積した財産を、社会に向けて放出することを意味します。自分が来世において、今より楽な環境の

もとに生まれたい、いい生活をしたい、もしくは輪廻から解き放たれたい、苦に満ちた世の中に生まれたくないという願いが、寄進という形をとって発動するのです。

それは、社会のためという動機によるものではありません。あくまでも利己的利害に基づいています。ひたすら自分の解脱を考えてのことです。たしかに廻向ということ、この功德を他に振り向けるということがあるので、必ずしも自分のことばかりを考えてはいないという意見もあります。しかし仏教という廻向は、自分の為した功德の一部がそちらに振り向けられるというのではなく、廻向の対象になったものが、その行為を知って随喜し、これによって功德を獲得し、また廻向をしたものの功德もさらに増加する、と説明しています。⁽¹⁰⁾要するに、寄進は自己を犠牲にして、世のため人のためということ成り立っている訳ではありません。他人のためというより、まずは自分のためなのです。だから皆こぞつてこれを実践するのです。

ところが寄進による富の消費は、結果的に世のため、人のためになっていきます。富を集めることができる人とできない人がいるのは確かです。これは、前世の因縁という考えかたからしても、ある意味仕方がないことかもしれません。しかし、運よく財を獲得できたとしても、その蓄積した富を来世に持っていきません。「あなた、そんなに金銀財宝に囲まれていても、来世には持っていきませんよ」となれば、死期がだんだん近づいてくると、これを持っていけるものに変換したくなる。寄進をして、つまり仏塔やお寺を建てることにこの富をつぎ込んで、功德に変換したくなるのです。

ですから、子どもに美田を残すということはしない訳です。土地があるから、親が死んだらこれを担保に事業を起こそうと考えていても、親は死ぬ前にこの土地をお寺に寄進してしまうか、もしくは売り払って、そのお金で仏塔を建立することに費やしてしまう。現在でもそのようなことが、実際おこなわれている。それは、子供や孫でも別個の存在で、かつそれぞれ転生を繰り返している存在ですから、その者のために何かを残すようなことをしても、自分には何も返ってこないからです。

何かの縁で、この世ではたまたま家族として相見えただけで、親は先に来世に旅立ち、再び人間として生まれれば別の家族を形成するし、ブタや、牛や、もしくは虫けらに転生するかも知れません。その人とは、今度いつどのような関係のもとで巡り逢うのか、まったく分からない。親子・兄弟姉妹・親類縁者や隣近所という関係は、この世だけの話であるということです。従って自分の子どものために財産を残すとか、家系が繁栄するようにという考え方は、基本的にはしない。意味がない。逆に、そのような考え方をしていると、富が世代を越えて一部分に蓄積され、世の中の格差がどんどん広がっていくことを、積尊はよく知っていたのです。

結局、富を蓄えても、現世だけの問題です。しかも、私はお金持ちになったことはありませんので胸をはつていえませんが、お金持ちになればなるほど、不安や恐れは増大するのではないのでしょうか。欲望にはきりがいいことはよく分かっておりますので、そういえるのです。そんなことよりも勇気を出して、物欲を断ち切る。これはなかなかできません。それを手助けす

るのが、因果応報、輪廻転生、功德による苦からの解放という考え方なのではないでしょうか。投資―利潤―投資による拡大再生産へサイクルから離れ、来世の幸せ、心の平安のためにこれを投資する。もう富や利潤を生み出さないものに変えてしまう。その結果として、仏塔や寺院が立ち並ぶ。われわれの感覚からすると、仏塔などは利潤を生み出さない瓦礫の山で、これがどんでん返りあがっていつている訳です。しかしこれは、個人が自分の私利私欲から離れるためにおこなった尊い所業の証しなのです。仏塔の輝きは、心の豊かさを追い求めた結果なのです。

おわりに

宗教改革で有名なマルティン・ルターの影響を受けて、一六世紀ジャン・カルヴァンという人が「予定説」を唱えました。天国に行くか、地獄に行くかは、神によってすでに決められてしまっている。これはどんな手段を用いても、動かせない。地獄に行くことと決まっている者は、地獄に落ちる。しかも、自分がどのように予定されているかを、知ることもできない、というある意味やる気をなくすような、極めて厳しい考え方です。

ただし、予定された道を知る方法が一つだけあるという。経済的に報われる、いろいろな事

業をしてこれが成功するということは、それは周りに受け入れられ、喜ばれているからであると考えます。つまり物が売れるということは、それを買う人の暮らし助け、幸せにしているからである。他人が気に入るような財やサービスを提供できるのは、それは神によって認められている証拠であると、理解する訳です。

従って自分の欲望を満たすためではなく、清貧な生活をしながら、獲得した財は、さらに他人に気に入ってもらえるような事業にまわす、つまり利潤が利潤を生み出すような事業に投資していく。そしてこれがうまくいくということは、それは隣人を豊かにしている証拠で、そのようなことができるのは、これは神によつて認められているからに他ならない。

明確な私たちではないが、こうしたことを通じて、自分は神の思し召しにかなっていることを実感でき、将来天国に召されることが確信できる。カルヴァンの「予定説」を信じる人は、富をできるだけ蓄積し、そしてその富を、また新たな富を生みだすものに投資をしていくのです。まさにマックス・ヴェーバーが指摘したように、これは資本主義の精神そのものですが、そういうことで自分の心の平安を得る。これだけ富を作り出し、すなわち隣人に幸せをもたらしたのだから、自分は神に愛されていることは間違いない、死んだら天国に行くように決められているからに他ならない、と思えるようになるのです。

これまでお話してきましたように、仏教はこれと真逆の考え方をします。苦の根源は欲にあるとして、これからすこしでも離れることを説く。蓄積していく財との縁は、できるだけ早く、

そして多く、切っていく。そうしないと、苦はいつまでもついてまわり、下手すれば地獄に落ちることにもなりかねない。新たな富を生み出すために、その富を使うなどもつてのほか。

過去仏の遺物や釈尊の頭髮八本を納めているとされる、ヤンゴンのシュエダゴン仏塔に行く
と、信者によって奉納された大きなルビーやその他貴金属が展示されています。現世で十分た
のしませてもらったが、これをもって来世には行けない。そこで財宝を仏塔に寄進し、功德を
たくさん為したという実感に変える。きわめて合理的な考え方です。これで、来世はもつとい
いどころに生まれる、という確信が生まれるわけです。

上座仏教的な世界観の中にある功德や寄進という考え方が、我われに示しているのは、勇気
を持つて欲から離れることは心の平安をもたらすだけでなく、社会の格差も是正されていくと
いうものではないでしょうか。個人の解脱だけを説いているのではなく、これを保障する平穩
な社会の実現をもたらす考え方であると理解する次第です。

註

- 1 こうした壁画については、日本では大野徹先生によって、紹介されております〔大野 1973, 1974, 1976a, 1976b〕大野・井上 1978〕。また壁画に認められる「一〇一人種」については、〔伊東 2016〕を参照下さい。
- 2 くわしくは〔大野 2002〕を参照して下さい。日本における第一人者の筆になるものです。

- 3 年中行事については、「生野 1995：二六三～二七〇」「土橋 2009：一一九～一四四」。
- 4 これらの数字は情報省が二〇一〇年に作成した『軍事政権下の国家進歩発展記録』（ビルマ語）から採られたものです【土佐 2012：二〇一】。
- 5 戒律主義については、「生野 1995：二九～三四」。
- 6 いわゆる「蕩尽」とは、贈与競争ではないという点で、異なります。
- 7 以下、マナオ祭の様子については、「吉田 1995：二三六～二五五」に依る。
- 8 以下、ロンユー祭については、「瀬川 2008：二二八～二三二」「瀬川 2011：六一～六一六」に依る。
- 9 後藤修身さんについては、<http://www.ayeyarwady.com/>を参照してください。
- 10 本書の第二章および「藤本晃訳著 2007」を参照下す。

参考文献

- エーエー（ハーカー）土橋泰子訳 2011『チン世界』『ミャンマー概説』（伊東利勝編）めこん、五九一～五九二頁。
- 土橋泰子 2009『ビルマ万華鏡』連合出版、一一九～一四四頁。
- 藤本晃訳著 2007『死者たちの物語―餓鬼事経』和訳と解説』図書刊行会。
- 生野善應 1995『ビルマ仏教―その実態と修行―』大蔵出版、二六三～二七〇頁。
- 伊東利勝 1976『Pagan, Pinya, Avaraha』ビルマにおける社会構成の変化について』『成城大学 経済研究』（内田直作名誉教授古稀記念論文集）第五五・五六合併号、三四九～三四五頁。
- 伊東利勝 2016『一八世紀エーヤーワデー中流域世界における異人のイメージ』『愛大史学』第二五号、二九～七八頁。
- Nash, Manning 1965. *The golden road to modernity: village life in contemporary Burma*. New York: John Wiley & Sons.
- モース、マルセル（有地亨訳）2008『贈与論』勁草書房。

- 瀬川正仁 2008 『微笑みの国と軍事政権ビルマとミャンマーのあいだ』凱風社。
- 瀬川正仁 2011 「南部チン州で「石引の儀式」を見る」『ミャンマー概説』（伊東利勝編）めこん、六一二～六一六頁。
- 大野徹 1973 「ビルマの壁画―バガン時代を中心として―」『東南アジア研究』一一（三）、三六〇～三八一頁。
- 大野徹 1974 「ビルマの壁画（Ⅱ）―バガン時代を中心として―」『東南アジア研究』一二（一）、七八～九〇頁。
- 大野徹 1976a 「ビルマの壁画（Ⅲ）―ニャウンヤン時代を中心として―」『東南アジア研究』一四（二）、二七〇～二八五頁。
- 大野徹 1976b 「ビルマの壁画―コンバウン時代を中心として―」『東南アジア研究』一四（三）、四四二～四六〇頁。
- 大野徹・井上隆雄 1978 『バガンの仏教壁画』講談社。
- 大野徹 2002 『謎の仏教王国バガン―碑文に秘めるビルマ千年史』（NHKブックス九五三）日本放送出版協会。
- 土佐桂子 2012 「ミャンマー軍政下の宗教―サンガ政策と新しい仏教の動き」『ミャンマー政治の実像』（上藤年博編）アジア経済研究所、二〇一～二二三頁。
- 吉田敏浩 1995 『森の回廊』NHK出版。

